我が街の記念碑 モニュメント 66

都電のレール

都営新宿線
一之江駅
徒歩16分

【江戸川・大工・土屋季和通信員】1925年、松江公園の北側を城東電車が走っていました。松江は江戸川区のほぼ中央に位置し、「松江大通り商店街」と称して区内でも最も歴史の古い商店街としてにぎわい、多くの住民に長年にわたり愛されてきました。

城東電車とは、城東電気軌道㈱が経営していた路面電車で、松江大通り商店街から南へ路地1本入った辺りが電車の軌道でした。一両しかないマッチ箱のような四輪電車で、当時は「ガタ電」として、親しまれていたそうです。

松江公園に設置されたレール

都電が走っていた町
松江の当時伝える遺物

今井橋（新今井橋の旧江戸川側のたもとから数十mほど行った所に当時の今井駅がありました）～東荒川を結び、この間は3・178㎞で、東荒川、中ノ庭、松江、一之江、瑞江、今井の停留所が設けられました。この3㎞を約15分かけてゆっくり走っていたそうです。開通当初は、今井から都心へ出かけるには小松川橋を徒歩で渡って乗り継いだとあります。その後、荒川をはさんで東荒川と西荒川の間はバスで連絡するようになり、西荒川から錦糸堀（現在の錦糸町）まで通じていました。

1942年に東京市が城東電車を買収したことにより、「市電」と呼ばれ、翌年の都政施行で「都電」と呼ばれるようになりました。

やがて、1952年に今井～上野公園間に東京で初のトロリーバスが開通すると、今井橋～東荒川間の都電は廃止されてしまいました。

そのトロリーバスも1968年には姿を消してしまい、この路線は都営バス路線として今も運行されています。

松江を走った都電の思いを込めて、松江公園にはレールのモニュメントが設置してあります。

あかね！

めざみかず　471

ナイショ話

失禁で起業

ちょうど10年前の9月、アメリカに留学中だった中西敦士は道の真ん中で大便を漏らすという失態をおかしてしまう。絶望感に包まれながら、偶然目にしたのが「大人用おむつが子ども用の売上高を上回る」というWEBニュース。

自身の苦い体験が、実は多くの人が悩む社会課題であることに気づいた中西は企業を決意。クラファン等で資金を調達、4年後には世界初の排泄予測サービスを誕生させた。

忘れえぬこと

理解しがたい彼の悪びれることなき言動

建設機械運転　高橋　均

今から5年程前のことになります。私は、調布市を中心に都内近郊で建設資材を運搬・搬入する仕事を生業としています。長い稼業の中でアルバイトや、時には雇用者として仕事を支えてもらうこともありました。

そんななか、10年近くいた人が高齢を理由に辞め、そんなタイミングで知り合いに紹介され39歳の加藤（仮名）さんが来てくれることになりました。普通免許を持っているので4tベースのトラックは運転でき、運転技能も問題ないことから調布支部にも加入し、一緒に仕事をする日々となり、仕事の飲み込みも良いので、一人で現場に行ってもらうことにしました。

初めのころ現場は近隣の現場をこなしてもらい、慣れた頃合いで、川崎の現場に行ってもらいました。概ね4～5時間程度で戻る仕事でしたが、1日がかりで帰ってきました。聞けば「渋滞だったので回避した」「都心を通ってきた」とのこと。ご存じの方なら調布―川崎間は「多摩川沿いや環八のあたりで」というところを銀座経由でと。

その後も「遠回りしてきました」あまりに悪びれずに言うのでとくと説明しましたが、改善されることはありません。しまいには「ビールを少し飲んで」これにはさすがに「違法でしょ！」即座に辞めてもらいました。

今の若いもんというほど若くもない彼でしたが、良識とか常識とかどうなっているのか、仕事と人の問題は常といえますがまったく理解しがたく、吃驚仰天〝忘れえぬ〟体験となりました。（調布）

詰将棋

持駒 歩

6	5	4	3	2	1	
		金				一
				王		二
		歩			歩	三
				馬		四
		竜				五
						六

チョット一服（1088）

サッカー日本代表が絶好調だ。ヨーロッパ遠征の2戦を共に4点取って快勝した。実際に相対したドイツの13番、あのミュラーが完敗宣言するのだから、その評価は決して身びいきの浮かれたものじゃないだろう。

トルコ戦の日本の4点目はPKながら、唸った。伊東純也がディフェンダーを長い距離のドリブルで振り切りゴール前へ。古橋もしっかり詰めており、得点の気配濃厚の中でのトルコのプロフェッショナルファウルだ。

決定機でのこのような反則を嫌う向きもあるが、ある意味「完全なる敗北」の表明だと思えば、溜飲が下がる。

本ほん

噤う伊右衛門　京極　夏彦

日常と狂気の間で揺れる純愛物語

【本部・砂川恵記】年齢や生活、仕事の状況の変化で、読後の印象も変わるのが読み返しの面白いところ。気に入った本は期間を開けて読み返すのが好きで、この本もその一つです。

「四谷怪談」は日本一有名な怪談と言われ、様々なバリエーションが存在します。顔の崩れたお岩さん、暗いストーリー、弱い女と身勝手な男の話、というイメージを持っていました。この本は、前述のイメージを払拭する面白さです。怪談というよりは悲劇のラブストーリーといったところでしょうか。

この四谷怪談の一番の特徴は、伊右衛門と岩の人物像をガラッと変えて登場させているところです。人間臭くて好感が持てます。また、江戸時代の階級差別、それぞれの階級で抱える貧困問題、女性の立場の弱さなどをしっかりと描きながら、伊右衛門と岩の純愛、登場人物全員が日常と狂気の間で揺れながら悲劇のラストに向かっていく展開に、とても引き込まれます。この作者の作品の特徴かと思いますが、同じ場面を別の登場人物の視点でそれぞれの思いで語りながら物語が進んでいきます。読み返しをすると、その都度別の登場人物に感情移入したりするので、別の物語のように感じるのも楽しいです。

そもそもこの作者の作品が好きで、20代の頃に読み漁りました。時代物を多く書いていますが、その時代くの政治、大衆心理、差別、理不尽さをしっかりと書き、掘り下げるので、どれも読みごたえがあります。長編が多いので、知人にお勧めするときには比較的短めのこの本にしています。（角川文庫・640円＋税）